

令和5年度生徒指導サポート実践校「特別活動の取組事例」

学校名	世羅町立世羅小学校	校長	小川 美樹	生徒指導主事	田村 和哉
取組事例名	『世羅小プロジェクト活動』				

1 取組の設定

取組を実施する意図及びねらい	取組を通して育てたい児童生徒像
主体的に役割を分担し、学校生活の課題を解決するという自治的な活動を通して、他者と協力して学校のために自分の力を発揮していこうとする態度を育てる。また、学校のために動く経験、動いて変わったことを他者から評価される経験を積ませる。	・主体的に考え、判断し、行動に移せる児童 ・自分のことだけでなく、他者や学校全体のことを当事者意識をもって考えることのできる児童 ・共通の目標に向かって協力し合える児童 ・自ら課題を見つけ、その解決に向けて試行錯誤できる児童



2 展開

取組の具体的内容	取組の創意工夫
○主に高学年児童が、「学校をよりよくするために自分たちにできること」というテーマのもと、各々プロジェクトを立ち上げる。各プロジェクトは基本的に児童の主体性によって成り立っており、教師も介入、指導はするが、児童の思いを最大限尊重し、活動させている。 (例)【みんなが人を大切にする学校にしたい】 →『思いやりプロジェクト』を立ち上げ、掃除時間などで、自分の担当の場所が終わった後、違う場所もきれいにする。また、学校のために朝の時間や休憩時間を使って、掃除やお手伝いをする。自分達以外にも、人や学校のために行動している人がいれば、写真に撮って、校内へ掲示する。	児童にめあてをもたせるために 教師が感じている学校の課題（ろうかを走る児童が多い、スリッパがそろわない等）を積極的に児童に困り感を伝えたり、教師が児童を頼る姿勢を示したりすることで、児童に課題意識と挑戦意欲をもたせている。 児童の意欲を高めるために 「学校全体のために」という大きなテーマを与えることで、「自分たちの活動で学校が変わる」という思いをもたせ、活動を自分事にしていく。 児童の頑張りを認め、価値付けるために 各プロジェクトの活動内容やメンバーの頑張りを積極的に全体に周知し、感謝や評価を伝えるようにしている。学校全体で取り組んでいる「価値語モデル」の取組とも連動させている。



3 成果と課題

○高学年になったらプロジェクト活動をする」ということが、児童の思いとして、そして学校の「文化」として根付きつつある。 ○高学年児童の姿を見て、1～4年生もプロジェクトに参加したり、自分たちでプロジェクトを立ち上げたりと、下の学年にも「自主性」の精神が引き継がれている。 ▲活動の充実の度合いが、プロジェクトによってまちまちである。文化として育ちつつあるからこそ、教師の価値づけや適切な介入がもう一歩必要であると感じている。
--